

学生力を引き出そう

副島, 雄児
九州大学基幹教育院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1799317>

出版情報 : 基幹教育紀要. 3, pp.1-2, 2017-03-28. 九州大学基幹教育院
バージョン :
権利関係 :

学生力を引き出そう

副島 雄児

九州大学基幹教育院, 〒819-0395 福岡市西区元岡 744

Let's bring out the power in students

Yuji SOEJIMA

Faculty of Arts and Science, 744, Moto-oka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

*E-mail: okosoe@artsci.kyushu-u.ac.jp

理学部担当の助手・助教授を経た後、専任教員として21世紀プログラムを担当して14年になります。21世紀プログラムがスタートしたのはその名の通り2001年度ですが、私は2003年度からこの任務に就きました。この間、私が学生たちに教えたことよりもはるかに多くの大事なことを、私は学生たちから学んできたと思っています。学生たちから学んだことは、私の教育に対する姿勢や、教育に臨む態度を少しずつ、しかし、確実に変えてきました。教育現場で学生に向き合うとき、私たち教師が学生に向かって放つ運動量に対して、学生達からその反動を着実に浴びせられていることを、特に最近強く感じるようになってきました。

21世紀プログラムを担当することになった折、私は「とてつもなく重要な任務を引き受けてしまった」と不安に駆られました。何しろ、学生たち一人ひとりが、それぞれの学修目標を持ち、さまざまな分野や学部で学び、まるで夏の夜空に開く花火のようにあらゆる向きに煌きながら舞い散って行くのですから。このような学生集団を束ね導いていくには、想像を絶するような教育に対する力量や思慮、経験や知恵が必要だろうと思えました。その当時、ただ一つ、確実に私が私自身に約束し実行に移せそうだったのは、「これくらいでよかろう、ここまでやっておけば大丈夫というようなことは一切考えず、21世紀プログラムの運営にも、そして学生たちにも、全力であたり、全力で対応すること」ということでした。

こうして臨んだ21世紀プログラムでしたが、私の不安はすぐさま払拭されました。学生たちが自ら考え行動し自分を磨き上げていく様子、互いに刺激し合って成長していく様子が私の目の前で繰り広げられ、学生たちが持つ力、“学生力”を見せつけられたのです。今思えば、私が抱いた不安は（恥ずかしながら）“学生力”の存在を無視していたために生じたものであることがわかりました。結局、私の任務は、学生たちが自由に、どこまでも、どこへでも動き回ることのできる学修環境を整備していくことでした。今になって振り返っても、環境整備に「全力を尽くす」ことがこの14年間の私の重要な任務だったと言えます。21世紀プログラム開始後に最初の4年が経つとき、全学委員会である21世紀プログラム専門委員会の議長が私に問いかけたことを鮮明に覚えてい

ます。「21世紀プログラムの4年間を見て、そして、最初の学生たちの卒業を迎えて、君はどのような印象を持ちますか？」という問いでした。「日々目の当たりに、学生たちが伸び伸びと、そして悩みながら、しかし全力で奮闘している姿を見て、私も頑張らなくてはと思うことばかりでした」というのが私の返答でした。その時はつまらない返事をしてしまったかなと思いましたが、それが私の一番率直な気持ちだったと思っています。

このような経験を積みながら、21世紀プログラムの学生に限らず九州大学の学生たちが、何を考え、何をどのように受け止めているのだろうかというような、私自身の学生を見る目が随分変わってきたような気がしています。同時に、こうした経験は、教師としとしての私自身が、学生たちにどう見えていて、どんな風に受け止められているのだろうかという内省や、ひいては、(大袈裟ですが)教師は学生にとってどの様であるべきかといった意識を私に持たせる機会を与えてきました。

皆さんが行っている講義で、学生が全く関心を示さず上の空だったり、居眠りしていたり、あるいは、そもそも講義を(ずる休みで)欠席していたら、皆さんはどう思われるでしょうか。受講生にとって、その講義が選択科目か必修科目であるかによって状況は異なるかもしれませんが、必修科目でさえもこのような状況は良く起こります。若年の頃の私は、「何をしに大学に来ているのだろうか？講義に来ずに何で大学生やっているのだろうか？もったいない時間の使い方をしてる自分に気付かないのだろうか？注意してやろうか、叱ってしまおうか」と考えていました。中年の頃の私は、「普段の勉強の仕方は人それぞれ、要は、本人が何をどのように勉強するか、講義に参加するかしないかは自分の価値判断で決めたら良い。自学自習で補い、期末試験で合格すればそれはそれでよし」と考えました。一方、老年の頃の私(つまりほぼ現在)は、「どうしてだろう？できるだけわかり易いように、興味が持てるように、学生の気を引くように講義をしているのに、なぜ関心を示さないのだろうか？まだまだ私の講義が魅力的でないということか！無念！」と思うようになっていきます。

つまり、私の受け取り方は、講義中の問題が学生側にあるという立場から、自分側にあるのではないかという立場に変化しているようです。皆さんはいかがでしょう。「クラスの学生全員の関心を集められない私の講義は、プロが提供するものとは言えないのではないか」、「私が教員としてプロを名乗るならば、学生たちが私の講義を楽しみに、笑顔で教室にやってくるような魅力的な講義を提供すべきではないか」など、講義において、私が“学生力”を引き出せていないことに気付くのです。

基幹教育セミナーや課題協学科目で、ここまでやれば合格圏内と言わんばかりに、計算したかのように講義を欠席する学生や、教室での取り組みに真剣さが足りない学生がいることを、私たち教員は嘆きます。その嘆きの対象は「学生か？自分か？」、どちらなのだろうかと思います。実現の可能性はとても低い気がしますが、私は、“学生力”を引き出す講義を模索し続け、学生が生きいきとした顔をして教室に入ってくるような、そのような基幹教育セミナーや課題協学科目を「実現してみたい！」という妄想に耽っています。